

一九八九年一〇月に第一回大会を開催した秋田内陸路を走る一〇〇キロマラソンは、一都八県から六八名の参加選手でスタートしました。

昨年、第九回大会を迎え、全国から一、六二一名の選手を迎え、地域のボランティアのみならずは二、〇〇〇名にもなりました。

大会当初、若者の地元定着や、地域活性化に係る様々な取り組みについて、全国各地からいろんな情報が寄せられる中で、秋田内陸部のタグラの面々が「おれがたも何かやらねばね」ということに端を発した秋田一〇〇キロマラソンでしたが、その後、大会を重ねるごとに県内はもとより全国各地から、前回比で倍々の選手を迎えることになりました。

大会運営に特別の経験があるわけでもなく、とにかく選手のみなさんの期待に少しでもこたえていきたい、もつと満足してもらえ大会運営をしなければならぬという「もてなしの心」にせかされて毎回の準備に追われてきました。

この間、当初の地域活性化のために何か役立つことをしたいものだという発想はどこかに吹き飛んでしまい、まず次の大会を成功させるためにあれもやらなければ、これもまだ十分でないという課題があればよあれよという間にどんどん大きくなっていくことには驚きあきれてしまいました。

各大会毎に選手のみなさんからは、たくさんのお便りをいただき、大会運営をはじめ多方面にわたるあたたかい励ましと厳しいご指摘を頂戴してまいりました。

この一〇年間、たった一日のために三六五日を準備にあてるという一年、一年を繰り返してきたように思います。

秋田内陸路一〇〇キロを取り巻く環境は秋田新幹線の開業やあきた北空港の開港などで大きく変化してまいりました。

こうした中であって、当地域の経済、社会的に背負ってきた「高齢化・後継者難・過疎化」という三つのKを「起業化・高付加価値化・広域交流化」という新しい三つのKに転換していくことをわたしたちなりに大きな課題として受け止めてまいりましたもの、まだまだ小さな芽生えとしてしか実っていない現実でもあります。

しかし、ある選手の「年々いい大会になってきている。今回は仕事上でも、これからの人生の送り方にもヒントをもらった」という言葉に励まされて清新の気概もあらたに選手のみなさんの期待に応えていきたいものです。

本書は、第一回の参加選手六八名から始まり第九回で一、六二一名にまでに拡がってきた大会の伴走車であり、今後の秋田内陸一〇〇キロチャレンジマラソンの先導車となるものでもありません。

なお、これまでの各回大会に参加された選手のみなさんの奮闘をたたえとともに、大会のた

びに熱心にボランティア活動をいただいたみなさんや沿道からの差し入れや応援を続けてくださいました地域のみなさま、厳しい経営環境の中でスポンサーとなってくださりました企業のみなさま、また関係されるすべてのみなさまに感謝し、お礼を申し上げます。

(一九九八年九月 第一〇回大会を迎えて)